現場との連携 Field Applications

童謡にも歌われる「故郷の春の小川」を取り戻すために

協働作業のようす

春になると郊外の田園地帯では、竹で編んだ簀（みの）、釣り竿、バケツなどを持った子供達が、大きな声ではしゃぎながら魚捕りをしていました。水田と一体になった農業用の用排水路には、多種多様な生物が生息し、魚を代表とする水棲生物のゆりかごとも言える場所、田園地帯を縫うように流れる小川は子供達が生き物たちと触れ合い仲間になれる大切な空間でした。「畦には田の神が、小川には荒神様が住んでいる。」と言い伝えられていました。子供達は、それらの神様の恵みに触れて、遊び、育てられていました。しかし、1960年代から、自然環境への配慮を欠いた農業基盤整備事業が始まり、用・排水路系は分離され、川の壁面と底はコンクリート化されました。今では小川の面影は何処にも見つける事は出来ません。このような水路では、亀やカエルはもとより、魚でさえ繁殖できません。直線化し、生物が棲めなくなった水路には、もはや魚を捕る子供達のはしゃぎ声を聞くこともできません。私たちは、岐阜県関市広見のU字溝と化した農業用排水路に、小川の生態系を少しでも取り戻そうと、石を入れた鉄線駕籠（かご）を設置し、曲がりくねった水流を造り、瀬と淀みを作ることを考えました。2005年に、私たちは自然共生研究センターを訪ね、科学的な裏づけと、そのモニタリングの協力をお願いしました。工事から5年、その排水路系は以前にも増して、絶滅危惧種に指定されている4種のイシガイ類を始めとする多様な生物が繁殖できるビオトープとなりました。私たちは今、この水路を参考に、童謡に唄われた「春の小川」を再現しようとしています。

NPO法人 ふるさと自然再生研究会 理事長
三輪芳明

河川環境の情報発信 Dissemination of Knowledge

国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所
アザメの瀬自然環境学習センター

地域住民が支える氾濫原の再生

川は下流域になると、平地をゆったりと蛇行して流れます。下流域の最も大きな特徴は、本流沿いに広がる平地、すなわち氾濫原です。

氾濫原には多様な生物の生息場所があります。かつての流れが取り残されてできた沼、湿地やたまり、本流とつながったワンド、クリーク、河畔林などです。

氾濫原は、出水時に冠水することで、生物の生息場所としての機能を保っています。

近年、氾濫原は生物の多様性維持のために重要であることが認識され、その再生が始まっています。佐賀県の松浦川アザメの瀬では、氾濫原の本格的な再生が地域住民と一体となって行われています。この一帯は、河川沿いに水田が分布していますが、松浦川と水田との連続性が断たれ、ナマズやドジョウ等の魚は産卵する場所や稚仔魚期を過ごす場所が不足していると考えられていました。そこで、河川沿いの水田の一部を氾濫原として位置付け、その水田を掘削して地盤を下げ、洪水時に水が入りやすくなるよう工夫しました。また、氾濫原の中にワンドやたまり、クリークを造成し、氾濫原内に多様な生息場所を確保しました。

氾濫原のような自然再生には、地域住民の協力が必要不可欠です。アザメの瀬では、住民が積極的に計画に参画しただけでなく、その後の経過の観察も行っています。現在では氾濫原再生の効果を実感として理解し、ここを訪れる人達に自然再生の重要さを伝える役割も担っています。現在、松浦川の氾濫原の再生箇所では、氾濫原の環境を理解してもらうため、フィールド体験型の研修が行われ、生物多様性だけに留まらない幅広い効果が期待されています。

岐阜県世界淡水魚園水族館「アクア・トト ぎふ」／
前（独）土木研究所 自然共生研究センター
真田誠至

松浦川アザメの瀬自然環境学習センター

再生させた氾濫原 アザメの瀬

ワンドを間近で観察できる回廊

フィールド体験型河川研修の様子